

ひとりひとりの 学びを保障する

— ゆるやかな協働性に支えられた個の学び —

●宿題も個別最適化を

——「宿題」も個別最適化の話題と関係していますね。

苦野 宿題も個別化して当然ですよ。みんな全く同じ宿題をやる必要はないので。小学生に関して、宿題と学力の相関関係はほぼゼロというような研究もあります。これは特に英語圏の研究ですが、一斉に与えられる宿題の場合、確かに言えているように思います。もし学びが個別化されれば、子供たちが「もうちょっとやりたいな」と思えば家でやればいいし、自分のスケジュールで、これはもう充分できているから今日はやらなくてよいとか、選べますよね。特に小学生は、宿題はやつけた仕事になってしまうことが多い。高校生ぐらいになると、研究では宿題と学力の相関関係が多少は出てくるのですが、それは、高校生は何のために宿題をやるかということが一応わかっているからです。でも小学生の場合はやつけた仕事になることが多くて、それだとやっぱりあまり意味がないですよ。宿題自体も個別化して、支えていく、支え合っていく。そして、もし個別化と協働化の融合が上手くいけば、先生がひとりひとりにかけられる時間が格段に増えます。なので、そうやって生徒たちの様子を見ながら、何かこの子は苦しんでいるかなと思ったらサポートに入ったり、協働的なよいコミュニティを作ったりすることですね。ここは先生の腕の見せどころなのですが、ゆるやかな協働性に支えられたよいコミュニ

ニティーでは、仲間同士が自然に助け合います。そういうダイナミックな助け合い、学び合いの力を活用していく。「宿題がでないと、勉強しなくなるのではないか」という心配もあるかもしれませんが、そうしたよい学びのコミュニティでは、周りの友



達が放っておかないんです。困った時は人に助けを求められるし、自分も、誰かの助けになれる。そんな環境をしっかり作っていくことが、これからはますます大事です。

● 子供の欲求を大事にする

—— 探究を駆動するポイントとは？

苦野 本物の文脈の中で学ぶというのが学びの本質なので、そこは決して見失ってはいけないところです。前回の号（『教育最前線』6号）の山本先生の実践も、本物の文脈の中で学ぶというものですよね。やはりどうしても学校の学びというのは疑似的というか、字面だけというかですね、そうなりがちなのですが、探究の学びというのはそうではなくて、本物の文脈の中で学ぶ。では、本物の文脈って何かということなのですが、これは個々人によって違います。個々人が関心を持てればそれは本物の文脈になります。ですから、いろいろなテーマに浸る経験を保障すること、また、先生がちょっとしたお節介者である必要もやっぱりあって、いろいろな文脈に子どもたちを投げ込むというのも大事です。インドの子どもたちに興味がない子たちもいるでしょうけれど、その文脈に投げ込んでみたら、なぜか興味がでてきたということもあるのです、そこが教育の妙技ですよ。子どもたちに任せる部分と、ちょっとしたお節介をするところとのせめぎ合いを、先生が、そ

れこそ探究していくというのが、これからの先生のすごく楽しいところだと思います。探究型の学習を駆動するためには、3つくらいポイントがあって、短期・中期・長期で私は語っているのですが、長期的にはですね、理想的にはですが、幼稚園や保育園といった幼児の時や、もっと小さい時から、遊びまわっているというのが大事ですよ。遊び浸っているということ。遊び浸るといのは、学び浸るというものの一番の土台ですから、遊びの中で、自分で創意工夫していくこととか、人とのコミュニケーションの取り方とか、何かに熱中することとかを学んで行くので、遊び浸った経験がある子は、自ずと探究ができるようになると、いろいろと子どもたち見ていると思います。でも他方で、中学や高校の先生方は、「今からではもう遅いです」とおっしゃいます。本当にそれはその通りなのですが、何と言いますか、それでも、自分の時間を大事にする。子どもたちは、大人時間、学校時間に支配されてしまっていて、自分で自分の時間をコントロールするということが、あまりできていない。出来合いのことばかり与えられてしまっていると、自分で探究することや、自分が難しくなってしまうですよ。ですので、自分時間を子どもたちに返していくというのも、中学高校でできると思うのです。そこは自分で考えてごらん、学校作りだって自分たちでやってごらんなどというのはできると思うのです。つまり、中期的には、ゆとりたりした時間を意識的につくるということですね。探究を学校で全面的にやりたいというのであれば、

思い切って一年くらい、生徒たちが興味のあることだけを手当たり次第にやってみる時間を確保するか。あと大事なのは、その過程で、お互いの関心とか、途中経過とかを持ち寄ることです。そうすると、相互触発が起こります。「あいつすごいな」とか、すごく刺激を受けるのです。あるいは、「コラボしたいな」とか。相互触発は探究の最高のドライバーになります。最後に、短期的には、本物との出会いをプロデュースする。本物の大工さん、本物のミュージシャン、本物の俳優、何でも構わないのですけれど、憧れの力が探究を駆動するわけです。こういったあの手この手を使って、子どもたちの探究心に火をつける、そこに先生の力量が、これから問われてくる。

ジョン・デューイは、「子どもたちは、もともと知りたい欲求、コミュニケーションしたい欲求、ものをつくりたい欲求、それから自己表現したい欲求という4つの欲求がかならずある」と言っています。本当は子どものころからずっとそれがあるのに、それを学校が殺してしまっているのではないかと。知りたい欲求があっても、「いまそれはいいからこれをやりなさい」ですとか、「コミュニケーションしたい」という時に「黙って先生の話を聞いていなさい」とやられているうちにこの欲求がどんどん殺されてしまうと言っていますね。だから実はすごくシンプルな話で、その欲求を大事にしようということ。そういう（学びの）構造転換を、ぜひ多くの方々と実現していきたいですよ。